九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

永野潤著『イラストで読むキーワード哲学入門』

大場, 健司
九州共立大学共通教育センター : 講師

https://doi.org/10.15017/6618259

出版情報：九大日文. 40, pp.21-23, 2022-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

◎書評

永野潤著『イラストで読むキーワード哲学入門』

大場健司（OBA KENJI）

永野潤氏の哲学入門書はいつも面白い。評者（大場）が初めて永野氏の著書を読んだのは高校時代の頃のことだった。当時から安部公房（一九二四―一九九三年）や大江健三郎（一九三五年―）の影響で実存主義（existentialisme）に興味を持っていた評者は、図書館に行ってはジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）やアルベール・カミュ（Albert Camus, 1913-1960）に関する研究書・入門書を借りていたものだ。そこで出会ったのが、永野氏によるサルトル入門書『図解雑学サルトル』（ナツメ社、二〇〇三年八月）だった。この入門書では、左頁に説明、右頁にイラストという構成でサルトルの実存主義が解説されており、まさに「われわれの問題」としてのサルトル哲学が非常にわかりやすく提示されていた。おそらく、サルトルの入門書として最良の一冊だと言ってよい。

そして、この『図解雑学サルトル』が優れているのは、ポストモダン（postmodern）を経たのちに、サルトル再評価を行っている点にある。一般的に現代思想は、実存主義→構造主義（structuralisme）→ポスト構造主義（post-structuralisme）という流れで理解されている。そのため、近年の現代思想入門書では、もっぱら構造主義・ポスト構造主義に焦点が当てられており、サルトルはポストモダンによって乗り越えられた「主体」の哲学として評価されてしまっている。しかしながら、『図解雑学サルトル』では、そのような批判には還元され得ないものとして、サルトル哲学が「関係」の哲学として再評価されているのだ。このようなポストモダン後のサルトル再評価は、柄谷行人『倫理21』（平凡社、二〇〇〇年二月）や三宅芳夫『知識人と社会――J＝P・サルトルにおける政治と実存』（岩波書店、二〇〇〇年五月）にも見られ、日本では二〇〇〇年前後からサルトル再評価が本格化したように思われる。この点で、『図解雑学サルトル』はポストモダン後のサルトル再評価をも射程に収めた画期的な入門書と言えよう。

同様のことが、この書評で推薦する永野潤氏の著書『イラストで読むキーワード哲学入門』（白澤社、二〇一九年四月）にも当てはまる。本書は、同じく白澤社から出版された永野氏の『哲学のモンダイ』（白澤社、二〇一一年三月）の続編のような位置付けの入門書となっており、『図解雑学サルトル』と同様にイラストが多用されている。ここで重要なのは、そのイラストが著者の永野氏自身によるものだということだ。「まえがき」にあるように、イラストは「既存の言葉では言い表せないことを言い当てようとするいとなみ」としての「哲学そのもの」となっているだろう（三頁）。ところで、筆者は本書のイラストを見て、

ヨシタケシンスケ（一九七三年―）の絵本『りんごかもしれない』（ブロンズ新社、二〇一三年四月）における「りんご」をめぐる思考実験を想起した。

本書は〈入門編〉の「イラストで読むキーワード哲学入門」と〈応用編〉の論文「怪物と眩暈――サルトルの怪物的ヒューマニズム」の二部構成となっている。本書を大学の授業などで用いれば、学生は〈入門編〉でイラストを通して哲学の教養を学び、その学んだ内容をもとに〈応用編〉の論文にチャレンジすることができるだろう。

次に、本書の内容を概観していきたい。前半部分の〈入門編〉では、一つのキーワードが見開き二頁で解説されており、左頁に解説、右頁にイラスト、という体裁になっている。ここで特筆すべきなのは、その解説がマンガやライトノベルといったサブカルチャーを例に取って行われているということである。例えば、「あたりまえ」の「常識」を括弧でくくって保留する「エポケー」（epokhe）の項目では、藤子・F・不二雄（一九三三―一九九六年）のSFマンガが例に挙げられている（一四頁）。そして、「日常性」という「見なれたもの」が「見知らぬもの」になることの例としては、サルトル『嘔吐』（*La Nausée*, 1938）と共に、岡崎京子（一九六三年―）の少女マンガ『Pink』（マガジンハウス、一九八九年九月）の一場面が挙げられている（一六頁）。

また、バートランド・ラッセル（Bertrand Russell, 1872-1970）の「世界五分前創造仮説」（five minute hypothesis）については谷川流（一九七〇年―）のライトノベル『涼宮ハルヒの憂鬱』（角川書店、二〇〇三年六月）が言及される（三六頁）。そして、「心身二元論」などの「身体」関連の項目では、荒川弘（一九七三年―）のマンガ『鋼の錬金術師』（『月刊少年ガンガン』二〇〇一年八月号―二〇一〇年七月号）が例示されるなど（四二―四四頁）、若い世代にも馴染み深い作品が登場する。『哲学のモンダイ』においても、岡崎京子『Pink』論である「違和としての身体――岡崎京子とサルトル」が収録されていたが、学生はこういったサブカルチャー論を読むことで、自分たちが見知っていたはずのサブカルチャーを哲学という新たな視座から捉えることが可能となるのではないだろうか。

後半部分の〈応用編〉では、サルトル『嘔吐』で主人公アントワーヌ・ロカンタン（Antoine Roquentin）がマロニエの木の根を見て「吐き気」（nausée）を感じる場面に登場する「怪物のような」（monstrueuse）という言葉が吟味されている。サルトルの実存主義はポストモダンによって「人間中心主義」として批判されてきたが、本書では「怪物」という言葉に注目することで、サルトル哲学が「人間中心主義」には還元不可能であることが示されている。つまり、サルトルの「実存」とは「主体」から絶えず抜け出そうとする「脱自」的なものであり、そこには「他ならぬこの私」の「私」から無限にはみだす「他」を内にはらんだ「怪物的自由」があるというわけだ。

このように、本書ではポストモダンによるサルトル批判を覆す試みが為されており、その試みは永野氏による他の論考にも見られる。例えば、澤田直編『サルトル読本』（法政大学出版局、

二〇一五年三月）に収録された永野氏の論考「サルトルの知識人論と日本社会――サルトルを乗り越えるということ」においても、サルトルの知識人論が、ポスト構造主義によって批判されてきた知識人像に還元不可能であることが示されている。

以上のように、本書ではイラストやサブカルチャーを用いることで、ポストモダン後のサルトル再評価を中心とした思想史が提示されていると言ってもよい。この点で、本書の〈入門編〉が「哲学」で始まり「倫理」で終わるのは象徴的だ。というのも、サルトルは第二次世界大戦後、「倫理」を積極的に提示しようとしていたのだから。

■目次

まえがき
〈入門編〉「イラストで読むキーワード哲学入門」
1「哲学」― 哲学／タウマイゼン／エポケー／日常性／アキレスと亀／嘘つきのパラドックス
2「認識」― 素朴実在論／知覚の因果説／第二性質／無限後退／洞窟の比喩
3「意識」― 夢の懐疑／水槽の脳／五分前創造仮説／我思うゆえに我あり／現象学
4「身体」― 心身二元論／機械の中の幽霊／心身問題／二種類の一元論／唯物論／生きられた身体
5「自由」― 機械論と目的論／決定論／リベットの実験／不安と自由のめまい／自己欺瞞
6「自己」― 数的同一性と質的同一性／テセウスの船／人格の同一性／転送機のパラドックス／反省／対自存在と即自存在
7「他者」― 他我問題／逆転スペクトル／独我論／類推説と唯物論／哲学的ゾンビ／対他存在
8「演技」― 演技／実存と本質／チューリング・テスト／イライザ／オリジナルとコピー／規律・訓練／パノプティコン
9「倫理」― ジレンマ／功利主義と義務論／創造的思考／障害の社会モデル／患者の自己決定と安楽死／優生学
〈応用編〉「怪物と眩暈――サルトルの怪物的ヒューマニズム」
1『嘔吐』における「実存」と「怪物」」
2『実存主義はヒューマニズムである』における「実存」と「人間」」
3『自我の超越性』における「自由」と「めまい」」
4『想像界』における「自由」と「めまい」」
5『存在と無』における「自由」と「めまい」」
6『聖ジュネ』における「自由」と「めまい」」
7『聖ジュネ』における「他者性」と「めまい」」
8「サルトルの怪物的ヒューマニズム」

（二〇一九年四月　白澤社　一五八頁　一八〇〇円＋税）

（九州共立大学共通教育センター講師）